この物語は96%フィクションです

川代山女

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
この物語は９６％フィクションです

【Ｎコード】
Ｎ９６２７Ｓ

【作者名】
川代山女

【あらすじ】
ちょっと変わった学園には超人たちが通っている
でも超人だって人間なわけで…
超人＋αの恋愛？物語
そう思っていた時期が私にもありました

始まりはいつも突然なわけで・・・（前書き）

この物語は高校生時代に友達と書いたものです
もしこれを読んでピンときた方は
「ああ書いてたな～」
と懐かしんでもらえると光栄です

一応前置きしますが、
この物語には統一性がありません
時空列もバラバラだったりします
思いつきなので仕方ないですね

文句はリアルの友人からのみ受け付けます

始まりはいつも突然なわけで・・・

「波田子はぴちぴち１８歳の可憐な女の子♪
今日も男の子のハートを射止めてあげるわ！！」
と、自分を波田子と名乗る顔は微妙な少女・・・まぁ少女はつぶやいた。
そんな波田子をみて、漆黒黒髪のミステリアス属性の水城はほほえみながら言う。
「ふふ、男のどこがいいのかしら？」
「いやいや、あんたはもうちょっと同性愛発言を控えなさいって・・・。」
と、水城に諭すのは金髪ツインテールこと帰国女、雪音。
「控えるって言ってもね、好きなんだから仕方がないでしょ？」
そういいながら水城は雪音の体にからみつく。
「ちょっ！やめ！どこさわっ！ゴラァ！！」
ゴッ！と、頭蓋骨がたたかれる音が鳴り響く。
しかし水城はからみつくのをやめない、頭から血を洪水のように流しているのにやめようとしない。
「は、放さないわ・・・。うふふふフフフフ。」
「ひぃっ！怖いから！」
同好会の部屋にはしばらく頭蓋骨をたたきつぶす音が響いていた。
血だまりにしずんでぴくりとも動かない水城をみて、雪音はさすがに不安を感じてかがみ込む。
「だ、大丈夫？」
「こういうデレる瞬間がたまんない！！」
と、何事も無かったかのように血まみれで水城は抱きついた。
雪音の悲鳴と同時に扉を開けて入ってきたのは、桃色のふんわりとした髪を持つ椿という少女だった。
その優しさと胸の大きさから男子にモテてやまない椿だったが、そ

の手に持つ兵器は誰もがおそれる・・・

「すいません皆さん、今日は調理部の方に誘われてクッキーを作ったんですけど。

私一人じゃ食べきれないのでみんなで食べませんか？」

その瞬間、同好会の部屋にいる三人の少女のいや、部屋の隅にいる紫の固まり

存在感が無い紫色のショートヘアの香苗を含む四人の少女の顔色が蒼白になった。

そう、北〇〇拳を習得した椿が作るクッキーはまさに世紀末に等しい味なのだ。

食べれば昇天間違いなしどころか、宇宙の果てにたどり着けるほどだ。

「あ、あたし水城を保健室に連れてくからアハハ・・・」

と乾いた笑みを浮かべて逃げようとする雪音だったが、そのかたを椿ががっちりとつかむ。

そして天使の笑顔で言う。

「水城さん元気そうですよ♪」

「え、いや、だって・・・こんなに血が出てるし・・・」

水城はビクッと肩を一瞬ふるわせるが、すぐに死んだふりをする。

だが、椿は平然と言う。

「呼吸音、心拍数ともに平常だ。北〇〇拳をなめないでくださいね。」

「あんた何物だよっ！」

と波田子がつっこみを入れるが、椿は笑顔でその口にクッキーをつっこむ。

波田子は力尽きた。

「波田子おおおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

雪音はそう叫びながら波田子に駆け寄る、という馬鹿なことはしないで椿から距離をとった。

水城もそれに習う、香苗は存在感を完全にこの世からシャットアウ

トした。
はずだった。
「そこだっ！」
椿は何もない空気に張り手をかます、その手の平にはクッキーがある。
椿は手を完全に開いているがクッキーは落ちない、つまりクッキーにかかる重力に勝る早さなのだ。
一瞬、まさに一瞬だった。
そして椿が手を下ろすと、宇宙の果てに旅立った香苗が床に倒れる音が響いた。
「え、えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！」
「か、香苗っ！」
波田子と違って香苗には駆け寄りそうになった二人だったが、必死に奥歯を加味してそれに耐える。
やつと戦って生き残るには、全ての情を捨てなければ勝てないのだ。
そして信じられないの物をみた。
一秒を何万分にも割ったほど体感時間が縮んだのだ。
そう、まさに不可避の速攻。
ネテ〇会長にも勝る、もはや王すらおいていくスピードで椿は地をかけた。
そしてはかない少女たちの命は散った・・・。
自分以外で動く物がいなくなった同好会の部屋で、椿は首をかしげた。
「みなさん、どうして寝てしまったのでしょうか？
おなかいっぱいになって寝てしまったのかな？」
そう、椿の本当に恐ろしいところ・・・
もう一度言おう！椿の一番恐ろしいところはその兵器の威力に気がついていないのだ。

そして誰もが必死に生を掴もうとするあがきを、ただちょっと照れてる程度にしか思っていないのだ。
まさに王たる器、自分以外の抵抗など赤子のようなもの。
「高校生にもなって、食べるなんてはずかしーよ。」
「うふふ、遠慮しなくていいの」
程度の会話にすぎないのだ。
そして王は静かにたたずむ・・・同好会教室で。

そして同好会はどこに行って何をするのか・・それは誰も知らない。

始まりはいつも突然なわけで・・・（後書き）

気にしたら負けです

ネタだと割り切りましょう

この物語は時空列がバラバラです

「波田子はぴちぴち１８歳の可憐な女の子♪
今日も男の子のハートを射止めてあげるわ！！」
と、自分を波田子と名乗る顔は微妙な少女……多分、少女はつぶやいた。
そんな波田子をみて、水城は間違いを示唆する。
「波多〇はぴちぴち１８歳の可憐な〇の子♪
今日こそ男の子のハートを射止めてあげるわ！！
でしょう？」
ニヤニヤと笑みを浮かべる
「なんだよそれ！！聞き手によってはただの変態になるじゃん！！
しかも『今日こそ』って！！」
地団太を踏み怒りを露わにする
「え！？違うの？」
波田子のつっこみを聞いた雪音が驚きながらそう言った
そこに水城がここぞとばかりに割って入ってきた。
「大丈夫よ。あなたのためにいい物を調合してきたわ」

波田子を可哀相におもった水城はポケットからフラスコを取り出す

「化学室を借りて作った媚薬よ。二つ作ってきたわ。でも……」

「なに？そんなものがあるなら早く言いなさいよ」

そこまでいうと水城からフラスコを奪い同好会室から出て行った。

「……材料が足りないものは他ので代用したからちゃんとした効果が出るか分からないわよ？」

もう波田子の耳には届いていなかった。

「何が無かったの？」

「そうね、サキュバスの母〇よ」

「で、なにで代用したの？」

「インキュバスの〇液よ」

「間違った効果が出るわね。絶対に、」

「そうね。女に飲ませれば正常な効果だけど、
男に飲ませればその男はゲイになるわね。
まあいいわ。男同士で頑張っていればいいわ」

そう呟く水城の顔は悪魔のようだった。

「あなた……わざとやっているわね？」
「ふふふ、どうかしら？」
そのあとすぐに思い出したように急いで続けた。
「そうだわ。おいしいお茶が手に入ったから一緒に飲みません？」
「べつにいいけど……それは何処産なの？」
「地元の生葉を私が揉んで作ったのよ」
雪音は嫌な予感がした。
「まさか、媚薬が入っていないわよね？」
「媚薬は波田子にあげたじゃない？」
「でも1つしかもっていってないわよ？
　あと『……』はなんて言ってたの？」
「ひ・み・つ・」（言ったらばれるじゃない）
「怪しいわね。あなたが先に飲みなさいよ」
「……わかったわ。飲みましょう」
数秒後、頭蓋骨の割れる音と悲鳴と恍惚な声が情報棟に響いていた。
床が血で塗れている中、香苗はその中で寝ていた

「ふあぁ……少しは静かにして欲しいぬ」
欠伸をして半分開けた目を擦ると返り血が付いている
あまりの状況に一瞬何が起きたのか分からなかったが
目の前の光景を見て目が覚めた。
その時扉が開き誰かが入ってくる。
それは調理部から戻ってきた椿だった。
彼女は部屋の惨状を見て微笑みながら口を開く
「皆さんよくこんなに散らかしましたね」
その笑みには呆れたような雰囲気が感じられた
「気のせいだぬ」
香苗は顔についた血をふき取り立ち上がる
椿は顎に手を当て考える
「早く片付けましょう。部屋が綺麗じゃないとせっかく作った料理がおいしく食べられません」
「え……」
香苗と返り血だらけの雪音と血だるまの水城は何を馬鹿な事を行ってんだと思った。

しかしそんな事を口に出すわけにはいかない
今すぐここからでなければ死んでしまう
「あ、私達保健室に行って傷を治してからじゃないと片付けられないから……」
雪音が香苗を連れて部屋から出ようとする。
「えー？生きているなら大丈夫じゃないですか？」
「傷開いちゃうぬ……」
香苗も意見を合せ協力する。
「……分かりました。早く治療してきてくださいね」
流石に椿もこの時ばかりは納得した。
（よかった。）香苗と雪音は心の中でホッとした。
そして二人は保健室へ向かっていく
すると媚薬を試しに行った波田子が怒り気味に戻ってきた。
「ちょっと！！この媚薬おかしいわよ！？男同士で抱きついているんだけど？」
「あ！いいとこに来ましたね波田子。まずこの赤い液体を雑巾で拭

いてくれませんか？」

「え……？別にいいけど？」

近くにあった掃除箱から雑巾を持ってきて拭いているとき。波田子は床に転がっている赤い物体に気がついた。

「波田子……貴方勝手に出て行っておいて文句言ってんじゃないわよ……」

残された力を使い、波田子の方向を向く

「水城なの！？よくもおかしなもの渡したわね」

目の前の血だるまを見下ろし睨みつける

「人の話を聞きなさいよ」

口を動かすもの辛いがせめて言わなければ波田子にボコボコにされそうだ

「とにかくちゃんとしたものを寄越せ」

「分かったから少しゆっくりさせなさいよ……」

水城の声がだんだん小さくなっていく

「何をしているんですか！？早く拭いてください」

波田子がいつまでたっても拭かないことを指摘した。

「え……ええ」

さっさと血を拭き、雑巾を洗う。その繰り返しが数十回に達したとき床は綺麗になっていた。

床はピカピカとまではいかなかったが元通り位までにはなっていた

水城は相変わらず血だらけであったが少し楽になっていた

「ちゃんと媚薬は渡すんでしょうね」

「分かっているわ」

ボロボロの服の中から黄色い液体の入った小瓶を取り出した。

「ほら、約束の媚薬よ」

水城は痛みに耐え、波田子に差し出す

「それを待っていたのよ」

波田子は今にも奪って出て行きそうだった。

「今度こそちゃんと聞きなさい。媚薬はあとこれだけしかない。
使いどころを間違えちゃだめよ」

「分かっているわよ♪」

小瓶を受け取ると急いで扉から出ようとしたその時、
「ダメじゃないですか♪椿の手料理を食べていかないと」
「へ？」
「それって蜂蜜じゃないですか？ちょっと濁っているあたり高級な蜂蜜なんですね？」
波田子から小瓶を奪うと椿の作ったシフォンケーキにかけた。
「あああああああああああわたしの媚薬がああああああああああ！！！！」
「さあ召し上がれ♪」
《あ》の形になった波田子の口にシフォンケーキ？ｏｎ媚薬が押し込まれた。
「ぎゃあああああ……あはははははは」
波田子は断末魔を残すとバタンと倒れた。
さらに波田子の後ろで誰かが倒れるような音がした。
「あれ？寝ちゃったんですか？食べてすぐ寝ると牛になっちゃいますよ？」
「そういえば部屋が綺麗になったのに他の皆さんがいませんね？
早く食べてもらわないと冷めちゃいます」

その後四人が保健室にまたお世話になったことは言うまでも無い。

この物語は時空列がバラバラです（後書き）

どうやら友人は話の続きを読みたいらしい
それならｔｘｔであげるから……
そんなことは言っても意味ないのだろうな
昔の文なので見てられないですね
今でもそうですが

この物語は設定がいい加減です（前書き）

考えてみたら原文は内輪ネタが敷き詰められている
不特定多数の人に見せるのにこれはちょっと……と思う
それに対し友人は「じゃなきゃ驚くわ」
暫くは内輪ネタが続きそうです

この物語は設定がいい加減です

コンピューター同好会の部屋のテーブルにウサギのぬいぐるみが置いてあった。

放課後になって同好会の部屋にきた香苗は、先ほどからずっとそれを眺めていた。

「……ウサギだぬ」

香苗は右をみて左をみる、一度廊下にでて人がいないのを確かめる。

ふるえる手で抱き上げると、モフモフとさわりハグする。

という状況を薄笑いを浮かべながら先ほどからみているのは水城と波田子であった。

波田子が最初に部屋にいると、後からきた水城が隠れろと言って二人でロッカーにいるのだ。

（せ、狭いな……。）

（うるさいわね、私はもっとかわいい娘と入りたいの！）

（波田子はぴちぴち１８歳の可憐な女の子♪
今日も男の子のハートを射止めてあげるわ！！）

と、二人でぼそぼそとロッカーで話している。

「かわいいぬ」

と、そんなことには気がつかない香苗は先ほどからウサギで遊んでいた。

（ふふ、今こそ私が発明したウサギ爆弾のとき！！）

（ば、爆弾！？）

波田子がうろたえると、水城は妖しく笑いながら説明する。

（実はあのウサギの中には大量の練乳が入っているの、そして私がボタンを押せばもはや練乳という白濁の（ｒｙ）

（や、やめろっ！）

（……だが断る）

そして水城がボタンを押そうとした瞬間、扉が開き雪音が入ってきた。

「っ！」

香苗はコンマ一秒でウサギのぬいぐるみを元の場所に戻す。

「あれ？香苗一人？」

「う、うむそうだ」

顔をうつむけてやや紅潮した顔を隠すように答える。

そして雪音は机の上にあるウサギのぬいぐるみを見つけた。

「っ！！」

完全にボタンを押すタイミングを逃した水城は、顔を曇らせて波田子の頭をたたく。

体制的には、ロッカーの中では波田子がしゃがんでいて水城がその背中に乗っていたりする。

「ちょ、ちょっと用事を思い出した」

そういって香苗はそそくさと同好会の部屋から抜け出していく。

いなくなった瞬間、雪音は左右確認、廊下をみて誰もいなくなったことをみるとウサギのぬいぐるみに抱きついた。

「かわぁいいっ！ウサギかわいいよー！」

ほおずりをして、胸に抱きしめて、そのままごろごろと床を転がっていた。

その光景を見ていた波田子は、不意に頭に生暖かいものがたれるのを感じた。

（はぁ、はぁ……ウサギになりたい）

水城が鼻血を垂らしていた。

「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！」

「っ！」

叫びながらロッカーから飛び出した波田子をみて、雪音は驚いてウサギを上に投げてしまった。

投げられたウサギは放射線を描きながら波田子の上に跳んでいき、

水城は土台になっていた波田子が抜けたせいで転びスイッチを押す。

結果、誰もが期待していない方の、誰もが望んでいないお色気シーンになった。

「ひゃぁぁぁぁぁぁぁっ！」

いまさらになって人がいることをしり、みられていることがわかった雪音は悲鳴を上げる。

「うぉぉぉぉぉぉぉっ！」

白濁の汁まみれになった、少女とは言い難い波田子はうなり声を上げる。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁ、目がぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

実験の失敗ともに、その目に飛び込んできたこの世の物とは思えないグロテスクな白濁の少女に、

天使のシーンを期待していた水城は目を焼かれた。

何はともあれ、同好会の部屋にはしばらく三人の絶叫が響いた。

そして、その場から離れようとして椿に捕まってすでに世紀末を迎えた香苗を片手で引きずりながら、帝王椿は扉を開けた。

「あの、何やらお騒がしいようですが大丈夫ですか？」

椿をみて、三人はハッと我に返った。

「つ、椿～、ぬいぐるみが破裂して波田子がキモ……エロくなっちゃったんだけど」

雪音はとりあえずそそくさと香苗を受け取り、いすに座らせた。

「テメッ！今キモいとか言おうとしただろっ！」

「いや、キーモンキーって言おうとしただけだから」

つかみかかってきた波田子のみぞおちに正拳突きをたたき込むと、雪音は手についた練乳をみて顔をしかめた。

「あらあら・・それは練乳ですか？」

「え？わかんないけど……水城が知ってるんじゃない？」

椿は雪音の手から、視線を水城に移した。

水城は未だにまぶたにこびりついてやまない場景に苦しみながら、ふらふらと立ち上がる。

「そ、そう……これは練乳よ。可憐な乙女たちを練乳だらけにしておいしくいただこうとしたの……」

「またそんなことを……」

あきれる雪音とは反対に、椿はにっこり笑うと今日の兵器をとりだした。

「今日はかき氷を作ったのですけど……ちょうど練乳が切れてたんですよ」

かき氷はこんなどぶの水のような氷の色をしてましたけっけ？

三人は同時にそう思った。

「う、うぅ……」

そのとき、香苗がうめき声を上げた。

香苗を保健室に連れて行った者が生き残れる！！

彼女たちは今ほどシンクロした考えをしたことは無かったと断言していいほど深くシンクロしてい

た。

それと同時に、どうすればこいつらを蹴落とせるかという非情なことも考えていた。

「か、香苗大丈夫？」

雪音は自分が一番近いことを祝福していた、だが。

「雪音、さきに手についてる練乳を洗った方がいいんじゃない？」

にっこりと水城が言った、その顔は

そのテは甘いのよ……

そう語っていた。

そして波田子は絶望する、自らの状況に。

だがそれは逆に突破口になるのではないか？

「椿、雪音とあたしは練乳洗ってくるから頼むわ」

「あ、そうですか？」

「しまったーっ！」

思わず声を出してしまった水城、そしてさらなる絶望が彼女を襲った。

「……ここはあの世だぬ？」

なんと香苗が目をさましたのだ。

もはや逃げ場は無い、ならば全員道連れにしなければ気が済まない。

「体に付いた練乳はもったいないじゃない？そのまま使いましょ？」

「そうですよね、地球の資源は無駄遣いしてはいけませんからね」

「なぬっ！」

「えぇっ！」

状況を理解していない香苗をおいた波田子と雪音は驚く。

今こそ波田子がバタ〇から教わった秘技を使うときがきたのだ。

「キング・クリムゾン！！」

そう、キングクリムゾンとは結果だけが残る。

この世の全ての結果だけが残るのだ。

つまり全滅。

やはり一人になった椿は困った用に顔をしかめる、そして三度に渡りもはや闇魔大王と親しくなった香苗が最初に戻ってくる。

「……閻魔様もたいへんだぬ」

「あ、起きたのですか？とういうか閻魔様がどうかしましたか？」

そう言いながらウサギを拾った椿をみて、香苗は顔を曇らせる。

「？どうしましたか？」

「佐藤さん」

「さ、佐藤さん？」

「そのウサギ、佐藤さんだぬ」

椿は首をかしげながら佐藤さんを香苗に渡した。

徐々に戻ってくるであろうみんなを見渡しながら、香苗はため息をついた。

「閻魔大王と仲良くなっても……」

閻魔大王と仲良くなれるかき氷、いかがですか？

この物語は設定がいい加減です（後書き）

はいはい、新キャラです
私は動物が大好きです
人間よりもね！

この物語は関係ないことで一杯です（前書き）

最近というより前からだが
私は話を作る才能がない
さらに長文書くのが苦手なので物語がサクサク進んでしまう
それは他の奴で戦闘シーンが3行で終わるほど

この物語は関係ないことで一杯です

「波田子はぴちぴち１８歳の可憐な女の子♪
今日も男の子のハートを射止めてあげるわ！！」

と、相変わらずウザイ不死身の乙女？波田子が叫ぶが、毎度のこと。

黄昏色に染まる夕方の同好会の部屋では、香苗と雪音と水城、波田子がいた。

香苗はなぜか佐藤さんをその手に抱いてそわそわとしていて、

雪音はその横でにやにやとわらっていた。

「早く読みなよ～」

雪音は香苗が机の上に置いた封筒を指さす、

香苗はそれを見てほほを紅葉させた。

実は先日香苗が告白した相手からの、返事の手紙を雪音が手渡したのだ。

波田子はおもしろくなさそうにしている。

そして水城は男なんかどこがいいのかとぼやいていた。

ようやく意を決したのか、香苗は佐藤さんを左手に手紙を開けた。

最初は顔を紅葉していた香苗だったが、徐々にその顔に色がなくなっていった。

そして香苗は手紙を縦に引き裂いた、そのあと太もものホルスターから包丁を取り出すと。

何度も何度も、何度も何度も打ち付けた。

何度も何度も何度も何度も。だ

そのうちぼろぼろになって読めなくなった手紙に最後に一度包丁を突き立てると香苗は立ち上がる

「か、香苗？」

不安げに香苗を見上げる雪音、香苗はどこをみているのかわからない視点でこうつぶやく。

「……殺してやる・・」

「え？」

「殺して殺してやるぅぅあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

佐藤さんが香苗の手からこぼれ落ちる、あいた両手で頭を抱える。

視点が揺らぐ、世界が崩れる。

許さないあの女、許さないあの男。

殺す。

「香苗っ！？」

雪音は香苗の肩を揺さぶった、香苗はゆっくりとした動作でその手をふりほどくと。

片手に包丁を握りしめて歩き出した。

「ま、まてっ！！」

波田子がその前に立ちはだかる。

「お、おまえ様子がおかしいよ。ちょっと、おちつ……がっ！」

立ちはだかった波田子の腹を、香苗は躊躇なく貫いた。

「じゃまをしないでください、私は今からあの女を殺しにいくですから」

「あっ、かっ！！」

あまりのことに、あっけにとられている三人、そして香苗はどう猛にほほえむという。

「そういえば、あの人が逃げないようにひもでつながないといけないね、クスクス」

包丁を引き抜くと、鮮血が吹き出す傷口に反対の腕をつっこむとそこから小腸を引きずり出した。

「ゲバッ！グボ……」

「クスクス、いいひもみーつけた」

その臓物を左手に握りながら、香苗はつながっている部分を包丁で引き裂いた。

口から血と泡をはいていた波田子は、白目をむくと失神してしまった。

そのまま香苗は垂れた臓物を引きずりながら廊下へと出て行った。

あまりの光景に、雪音と水城は香苗を止めることすらできない。

そのころ、模型同好会の部屋では憐華が一人の男子生徒に言い寄られていた。

男子生徒は先日香苗に告白された男であり、返事の手紙を書いた後自分の気持ちを伝えようと

模型同好会にきたのだ。

深紅の色をしたサイドドリルヘアの少女は、完全に見下した目でいった。

「あなた、馬鹿ですわ。私があなたのような愚民とつきあうとだなんて思わなくて！」

「そ、そんな～」

「消えるがいいわ、あなたのような軟弱な男などより模型の方が……いえ、比べる価値もない。

このような愚民と比べるなど失礼きまわりなかったわ」

憐華はどういって、男の腹を蹴り飛ばした。

しかし男子生徒はそのけりを食らって、とても幸せそうな顔をしていた。

「な、何を笑ってらっしゃるの！！」

「えへへ……」

「おぞましいっ！おぞましいわ！！」

何ども蹴り飛ばすが、男子生徒はさらに幸せそうな顔へとなっていった。

一方香苗がいなくなったコンピュータ同好会の部屋。

水城は開発した薬で香苗がゴミくずにした紙を復元していた。

彼女が使っているのは時の砂、どこかのＲＰＧで使われているものだ。

その砂をかけることで、かけた物体の時間をわずかだが戻すことができるのだ。

ちなみに波田子には使わない。

なぜならもったいないからとのことだ。

ただの紙に負ける波田子の明日はどっちだ！！

「ひ、ひどい……」

「いいじゃん、再生したんだから」

泣いている波田子を尻目に、雪音は肩をすくめた。

水城は復元した紙をみてため息をつく、所詮男など低俗だと。

「そういえば、今日椿はどこにいるの？」

思い出したように雪音がいうと、水城は苦い顔で答える。

「今日も調理部で核兵器を作ってるわよ……まだきてないとこをみるとできてないみたいね」

そうか、この砂をかければ兵器の前に戻るんじゃないかと気がつく水城だったが。

その程度でなんとななる兵器ではない。

あれはもはや人類の負の固まりなのだ、そもそも効果より以前にかける時間がない。

「あたし椿に電話して、香苗を止めてもらうよ」

そういうと、雪音は携帯電話を取り出すが電池がない。

「波田子、電話貸せ」

「え、ちょ、ちょっとまって。ロックとかあれじゃん」

「だまれ、緊急時に貴様のいかがわしいものなどどうでもいい、むしろ貴様にプライバシーなどないのだ」

人格が変わるほどの氷のまなざしで雪音がいうと、波田子は嫌々ケイタイのロックをはずした。

そして廊下をふらふらとあるく香苗の前に、王が立ちふさがった。

最終兵器の発明が間に合わなかったが、その実力はおそらく地球最強は当然。

おそらくこの銀河の中でも1，2を競う実力なつよさ。

椿は香苗の手から包丁を落とそうと時を止める。

「時よ止まってください！！」

そして椿は香苗の手から包丁を取り出そうと近づく、だが身の危険

を感じ一歩下がる。

一瞬椿をいた場所を香苗の包丁が通り過ぎた。

「そ、そんあっ！私の世界で動くなんて……時を止めた世界に入門するなんて……」

香苗はゆっくりと包丁を椿に向けると笑う。

「クスクス、私の包丁”菊一門”は次元を切り裂けるんですよ」

つまり、香苗の包丁を操る技術と名刀菊一門の二つによりその切れ味は次元を切断するほどにあがる。

それは時を止めようが関係ないのだ、止めた世界を引き裂いてそこから入り込むことなど当然。

空間に穴をあけることもできるのだ。

だがこれはヤンデレモード時限定の能力、故に最強。

愛の力なのだ。

「なめないでくださいっ！」

そう叫びながら椿は地をかける、たとえ最強の能力を持とうが椿には最強の素早さがある。

椿は容赦なくけりをたたき込んだ、香苗は反応できずその攻撃を受

けた。

はずだった。

香苗の影の中から湧き出た手が受け止めていた。

力学的エネルギーの法則など関係なしに、椿のけりを受け止め動かない手。

香苗があの世から呼び出した亡者の手、生者の生気を喰らう手。

椿はその手に足を握られて、三分もたつと唇を青くして倒れた。

その顔をみてほほえむと、香苗は模型同好会へと向かっていく。

コンピュータ同好会の部屋で雪音がつぶやく。

「あれ？佐藤さんは？」

部屋を探してみたが、佐藤さんは見つからずに結局香苗が持って行ったという結論になった。

模型同好会で男子生徒をなぶっていた憐華だったが、ふと背後からの殺気に後ろを振り返る。

ぐちゃぐちゃの内臓を左手に引きずり、影から無数の手を触手のように出している香苗がいた。

「なっ、な……」

「みーつけた」

香苗は獰猛にそうほほ笑むと、包丁を構え憐華へと走りだす香苗だったが、憐華が腰から出した黒光りするものを見て足を止めた。

憐華が取り出したのはマグナム、そして憐華はためらいなく引き金を引いた。

ダンッ！

という爆発音とともに、弾丸は香苗へと飛んでいく。

香苗の足元から生えている亡者の手がそれを受け止めて吹き飛ぶ、だが香苗には弾丸が届かない。

そして爆ぜた亡者の手はゴボゴボと再び湧いてくる。

「クスクス、無駄だよ」

「っ！」

憐華はマグナムをがなくなるまで打ち込むが、その破壊力をすべて亡者の手は受け止める。

香苗はほほ笑むと、ゆっくりとした動作で包丁を憐華はへと向けた。

「クスクス、あなた程度の愛じゃ届かないんですよ～」

「なめるなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

憐華はこれまたどこから出したのかトンプソン式機関銃を出すと、香苗に向って引き金を引く。

ババババッ

だが香苗は止まらない、包丁を引くと走り出す。

亡者の手で憐華はの弾丸をすべて防ぎながら、香苗は憐華との距離を刃を詰め突き出した。

危機を感じた憐華は横に全力で飛ぶが肩を掠めた包丁に顔をしかめる。

香苗はそれを横目で見ながら内臓を憐華へと放る、着地と同時に憐華は両手に持ったハンドガンで撃ち落とした。

波田子の内臓が派手に飛び散ったそれが憐華の視界を狭める。

撃ち落としたのが失敗だったことに気がついた憐華の首を、血まみれのかなえの手がつかんだ。

その顔は狂気に歪んでいた。

「させるかっ！！」

その時っ！！波田子が憐華と香苗の間に滑り込む、刃は波田子の右肩を貫いた。

波田子は刺さった刃をつかむと、そのまま叫んだ。

「アタシごと撃てっ！」

「わかりましたわ！！」

憐華はためらうことなくとりあえず波田子の後頭部へすべて打ち込んだ。

弾丸は波田子の頭を貫き、そのまま香苗へと降り注ぐが亡者のてが受け止める。

そのままバックステップで距離を取ろうとした香苗だったが、再びよみがえった波田子が包丁を握りしめ離さない。

バランスを崩した香苗に憐華がけりを叩き込んだ拍子に、包丁がその手から離れる。

「くっ、これで落ち着くはずだ……」

香苗の設定では包丁を放すと、ヤンデレモードが解けることになっていた。

だが解けない、香苗はゆっくりと起き上がりながらポケットからカッターナイフを取り出し構えた。

「な、なんで！？」

「クスクス、私が許さないだけですから」

だが波田子はすぐに様子の違いに気が付く、香苗のまわりに亡者の手がないことに。

つまりヤンデレてはいるが、すでに普通の女子のステータスになってるのだ。

「っく！」

波田子は香苗を止めるために右肩から包丁を抜き、遠くに投げ捨てた。

「止めてやるさっ！」

そのまま突っ込んだ波田子だったが、頸動脈を切断され瞬殺された。

波田子の血が再び上がる、香苗は微笑みながらいった。

「しってました？ファンタジーの世界では剣は銃よりも強いんですよ」

「……」

無言で憐華は側のハンドガンをすて、もう片方に弾を込めると両手で構えた。

両者に無言の沈黙が流れる。

そして憐華が引き金をひく直前、香苗は体の力をすべて抜いてそのまましゃがんだ。

弾丸は香苗の頭上を突き抜ける、あわてて引き金を引くがうまく狙いが定まらずすべて朝手の方向に飛んで行った。

「おわりですよ」

「っ！！」

憐華の首を一刀両断するはずのカッターは、間に入ってきた白いものに遮られた。

白いものは首と胴体を分けて床に転がる、切れたところからは綿がのぞいていた。

「あ……あぁ……さ、佐藤さん……・・」

波田子をさしても止まらなかった香苗の手が、初めて止まった。

佐藤さんは頭だけで笑う。

「嬢ちゃん、女は刃を振り回すもんじゃないぜ」

「な、なんで……？」

状況をよくわからない憐華は顔を曇らせながらも香苗に銃口を向ける。

乾いた発砲音とともに倒れたのは、再び間に入った波田子だった。
香苗は波田子には見向きもしないで、佐藤さんの頭を抱き上げた。
「ど、どうして……？」
佐藤さんはフッと笑うと言った。
「テメーの女の不始末は自分で拭わないとな」
「さ、佐藤さん？」
香苗の瞳から涙がこぼれる、波田子がなんどしんでも流さなかった涙を香苗はながす。
「よくわからないようだったら、もう一度言ってやる！！お前は俺が嫁にもらう！！」
「佐藤さーん！！」
香苗の手からカッターがこぼれおちた。
ぬいぐるみを抱いて泣いている香苗を見て、憐華が首をかしげていると水城と雪音、そして椿がやってきた。
二人は倒れていた椿を介護していたのだ、そして水城は佐藤さんを見て悲しげな表情を作った。
「あなた……そんな無茶をして……」

「さ、佐藤さんってしゃべれたのか」

雪音のつぶやきは香苗が倒れたことにより誰も返答してくれなかった。

椿は難しい顔をして言う。

「あれほどの力を使ったんです、肉体が弱って当然ですよ」

椿は香苗を起こすとその口に、

「何事も糖分が肉体を回復させると聞きますからね」

とどめをさした。

意識がとんだ香苗はさらに遠くへと飛んで行った、

この場にいるほかの人間も同じ運命になるのは時間の問題だ。

そして波田子は一人溜息をつく。

「アタシの扱いがひどい……」

そんな波田子の呟きもクッキーによって遮られた。

この物語は関係ないことで一杯です（後書き）

新キャラ＋佐藤さんが喋る
前に佐藤さんのイメージを描いてもらった事があるがどこかへ行ってしまった

そして私は銃に詳しくない
だからあれだ、許してくれ

この物語はよく分からないネタが仕込まれています（前書き）

原文にはこれお話の前にちょっとしたお話が入ってますがそれはまた後で入れようかと思います
私の性格上、話が暗くなってしまうので……

この物語はよく分からないネタが仕込まれています

「波田子はぴちぴち……」
「めんどくさいノーコメント」
そんないつものセリフを言おうとしたとき雪音がふと考え付いた
「そういえばそのセリフって死亡フラグじゃないの？」
そんな当たり前のことを呟くと雪音はX箱2πの電源をつけた。
「あっ！！てめっ！！勝手にアタシのゲームをするな！！」
ゲームのソフトは波田子のものである。
確かに波田子に一言位はかけてもいいはずであるが……
「だまれブスが！皆でやるからいいじゃねえか」
佐藤さんが香苗に抱かれながらセリフをはくと唾を吐き出した。
それは綺麗な放物線を描くと見事波田子の顔に直撃した。
波田子が顔を手で拭うと唾だと思ったそれは練乳だった。
「今頃練乳かよ……しかも何処にそんなものが……」
波田子が呆れ顔で呟くと、水城に理由を聞こうと思ったのだが
水城は部屋の中にいなかった。
「あれ？水城は……」
波田子が会員全員に聞くと
「あ、私のほうが先に気付いてたんだからね。先に言わないでよ」
雪音のデレ発言以外は「知らない」の一言だけだった。
そこにさらに佐藤さんの口から練乳が吐き出されて波田子は更に顔射顔になった。
波田子は何もいわずに顔を洗いに行った。

一方、模型同好会では
憐華が模型に囲まれながら

黒髪の少女と話をしていた。
「よくいらっしゃいました。どうぞお座りなって」
憐華は椅子を引くと黒髪の少女、水城を座らせた。
「どうも」
と一言言うと長い脚を組み憐華と向き合った。
「この部屋で会うのも久しぶりですわね」
「1年ちょっと前ね」
水城はさらっと短く言うと憐華の次の言葉を待った。
「久しぶりに会ったのだけれど、単刀直入に言うわね。
私達に就かない？」
そう聞いた瞬間水城は眉をひそめた。
「嫌。あなた達サイドに行ったところでメリットはないから。それにここはシンナー臭いから嫌」
そんなことを聞いても憐華は何一つ動揺しない。
「そう言うと思ってたわ。でもね、あなたに拒否権など無いのよ」
憐華が指を鳴らすと何処からか男子生徒が水城と憐華を取り囲んだ。
「あなたはあの中で一番弱そうだもの。さらに手ぶらで来るなんて無用心すぎですわ」
確かに水城は攻撃手段がない。
実際には無いのではなく、する必要が無い。
常人離れした人達に囲まれてるおかげで
攻撃をすることがないのである。
一番弱いのも確かだが他人に言われるとカチンとくる。
「確かにそうだけれどねぇ。赤の他人に言われるとねぇ」
水城は眉間にしわを寄せ、口がヒクヒクと震える
「あら？反抗する気？無駄ですわ。こんな人数をひ弱な貴方が相手できるはずがないですわ」
憐華はマグナムを取り出すと水城に銃口を向けた。
ハンマーを下ろし、いつでも撃てる状態にした。
「たまには思い切り動くのも良いかも知れないわね…」

そう言うと両手に手袋をはめると
立ち上がるとゆっくりと憐華に近づいていった。
「交渉決裂ね」
憐華は発砲と共に水城の苦悶の表情を想像した。

コンピューター同好会では
佐藤さんだけが銃声を聞いていた。
「姉御……まさか」
佐藤さんは聞こえないように呟く。
しかし動こうとはしなかった。
会員たちを巻き込まないようにと水城が気を利かせているのだと
佐藤さんは気が付いたからである。
香苗、雪音、波田子の三人はサバイバルゲームをしていて
本物の銃声に気が付かなった。
最近のゲームはリアルだから仕方が無い。
「ちょっと波田子！高台から狙撃なんてずるいわよ！」
「戦場において絶対に優位な状況に持っていくことが生き残れる方法だ。
　諦めろ」
さすがにゲームの中では波田子は強かった。

本物の銃から放たれた弾丸は水城に届く前に消えた。
憐華は目を疑った。
水城が手を払うと水城に当たるはずの弾丸はいきなり消えたのだ。
「貴方は一体何者ですの！？」
水城は嗤う。無知な人間を、そして言う自分の存在を
「男嫌いのただの錬金術士、よ」
不敵な笑いを浮かべ楽しげに言い放った

憐華は化け物だらけのコンピューター同好会に恐怖を感じた。
「なんてことですの……あの小娘に仕返しをしようと思いましたのに……」
一歩下がり苦虫を噛み潰した様な顔をする
「それが狙いだったのね。くだらないわ」
水城は部屋から出ようとする。
憐華は男子生徒に外に出すなと命令した。
男子生徒は水城の前に立ちはだかるが、
水城は男子生徒に軽く触れた。
男子生徒は吹っ飛び、壁に叩きつけられた。
しかし他の生徒が襲い掛かろうと水城に近寄るが
後一歩のところで動かなくなった。
いや動けないのだ。
足元には錬成陣が描かれている。
床が脚にまとわりつき、
憐華を含め十数人全ての動きを止め、
水城は暴力は好まないわ。というと
手から爆弾を作りだし部屋を後にした。

波田子はゲーム内で手榴弾を投げて
雪音のキャラクターを攻撃する。
轟音をたてて爆発する。
一撃死だった。
「ああっ！避けられないじゃない！！」
雪音が叫ぶ。
「にしてもリアルだぬ」
香苗は波田子のキャラを狙撃する。
「今の爆発は本当に爆発したみたいな感じだったな」
波田子はそれを避ける。

なにもんだ波田子！！
「ゲームばかりやっていると視力が落ちるわよ」
そう言いながら水城が帰ってきた。
「あ。お帰りーどこ言ってたの？」
と雪音が言うと水城は口元が緩んだが必死に我慢した。
「時間が無いわ。また後で」
というと三角フラスコに入った青色の液体を残すと
また何処かに言ってしまった。
フラスコには【解毒剤】と書かれていた。
雪音は「まさか……」と呟いて急いで部屋から出ようとするが
もう遅かった。帝王が来てしまった。
「皆さーん。差し入れを作ってきましたよー」
水城は椿が来ることを感じていたのだ。
そして解毒剤を持って来てくれたのだ。
雪音は急いで解毒剤を口に含んだ。
苦い。だがあれを食らうのに比べればましだと思った。
「さあ皆さん召し上がれ♪」
そして三人の口に紫色のゴマ団子が入れられた。
雪音は解毒剤を含んでいたにもかかわらず
意識が飛んでしまった。解毒剤ごときでは防げなかったということ
だ。
「一人いませんね。探しましょう。ザ・ワールド！！」
そして水城も飛んでいってしまった。水城の遺言は「やっぱり駄目
だったのね……」だった。
その惨状をみて佐藤さんは
「やれやれだぜ」

黒くなった模型同好会の部屋では
憐華が悔しがっていた。
「諦めませんわ！！絶対に復讐してさしあげるわ！！」

倒れた男子生徒に乗りながら地団駄を踏んでいた。

この物語はよく分からないネタが仕込まれています（後書き）

いちいち改行をすると見にくくなるかと思いまして改行せずにやってみました
私は大して気にしない性格なので読んでいる人から見たらどうなのだろう

この物語は明確な終わりはありません（前書き）

ネタが浮かんでも途中で書く手が止まりそのまま放置することがたくさんあるので
投稿できるくらいの長さのものはもう殆どありません
なんか昔を思い出しました

この物語は明確な終わりはありません

困ったことが起こってしまった。

会員達が集まっていない。
香苗は佐藤さんと一緒にお出かけしているし（学校内で）
椿はいつもの如く調理部へ
水城は作者によって無期限休養が出されてしまい
旅行に出かけてしまった。
よって部屋にいるのは雪音と波田子だけになってしまった。
「みんなどうして私を置いていくの……」
雪音はゲンナリシテイル。よほど置いていかれたのが
心にきたのだろう。
「で、何であんただけいるのよ」
波田子の方向を向いて疲れたように呟く。
「いちゃ悪いのかよ」
波田子も置いて行かれたのが悲しかったようだ。
波田子がパソコンの前に座ると、
ネットに繋いで誰かにメールをしているようだった。
雪音は「波田子と二人だけでいてもすることが無いな」
というような気がしたので香苗を探すことにした。

一方、屋上では一人の女子がコンピュータ同好会員を狙撃しようとしていた。
「しまったわ！屋上からは狙撃できないですわ！！
　せっかく無断で屋上に来たのに意味が無かったですの」
情報棟は屋上から見えづらい構造になっているのだが
そんなことは憐華は考えていなかったようだ。
「まあ、サーモグラフィーを使って壁ごと貫通してしまいましょう」

憐華がスナイパーを構えると同好会室を狙った。
「あら？一人しか居ませんわ。誰でもいいわ撃っちゃいましょう」
憐華がトリガーを引くと弾丸は真っ直ぐ飛んで行き見事に命中した。
「やりましたわ！！
早速見に行きましょう！！」
憐華は当たったのが波田子だとは知らないようだ。

憐華が部屋に見に行くと波田子が何事も無かったようにパソコンをしているではないか！！
「何故ですの？確かに当たったはず……」
憐華は思い出したように手を叩いた。
「そうでしたわ！！あれは確か不死身のあれでしたわね」
しかし、憐華は思い出したはいいがあれをどうしようか悩んでいた。
人質にしてもあれを助けてくれる様な人は居ないような気がした。
仕方が無いのであれを黙らして部屋で待ち伏せをしようと考えた。
そして憐華は思い切りドアをひらいた。
「さあ！貴方には黙って貰いますわ！！」
自分でもこの切り出し方はおかしいと思ったが
慌てていたので仕方が無い
するとドアを強く開けたので積みあがった本が見事
波田子を押しつぶしてしまった。
「まあ、なんだか分かりませんが倒しましたわ！！」
憐華の顔は嬉しそうだ。
もう喜びまくって凄かった特に顔が
「不死身の奴を倒しましわ！！」
憐華がパソコンの画面を見ると
メールの送信画面になっていた。
宛先を見ると《黒いお姉さん》と書いてあった。
なんとなく予想がついたが、何故同じ会員なのに

名前で書かれていないのか不思議に思った。
とりあえず
『あなたのいる会員の波田子を倒しましたのよ
　おーほほっほほほほほほほほほほ。』
と送っておいた。憐華は
とてもすっきりした。

一方、社会科準備室では一人の少女が本を読んでいた。
名前は渋谷真央　という。
一部の人からは魔王様と呼ばれているが
それは男勝りな態度と魔王の如き残酷さを持っているからだという。
そう呼ばれることを真央は慣れていた。
真央がある人から借りた○○から○○！を読んでいると
一匹の猫が近づいてきた。
「あれ？猫ちゃんどうしたの？飼い主と一緒じゃないの？」
真央は、黒猫の頭をなでて和んだ。
「ごろにゃあにゃあーにゃ」
使い魔なのに言葉は喋れないみたい。
「『ご主人のご友人が伝えたいことがあるから知らせに来た。』と」
「にゃあ！にゃにゃにゃあ、にゅー」
「え！？『そう！憐華が馬鹿やってるからあまりやり過ぎないように釘を刺しておいて』だって？」
なぜ猫語が分かるのか不思議である。
「分かった。監視を始めるから下がっていいよ」
そう言ってテレビの電源を付けるとビデオ４で憐華の行動が見れるようになっていた。
「なー」
黒猫は静かに闇に消えていった。
―（う～んいまいち展開が分からない）
不思議に思いながら小さく呟いた

そして重い腰を上げてテレビの電源を入れた。
テレビの画面には様々な場所が映されており
その中からコンピュータ同好会の部屋を選び拡大した。
「たしかにバカやってるね。
　もう少し観察してみるかな」
テレビから３ｍ離れて眺めていた。

そのころ憐華は未だに優越感に浸っていた。
「わたくしが一番強いですのよ。なんたって不死身を
　倒したんですから……」
そのときデートから帰ってきた香苗と佐藤さんが部屋に入った。
「遅れたぬ～」
「今来たぜ」
そして部屋が本で散らかっているのと憐華が本に乗っている、
本の山の間から手が出ている風景が目に入ってきた。
「佐藤さん、あの手は波田子かぬ？」
「だろうな、あんな汚い手はブスしかいねえ」
「一応助けたほうがいいかぬ？」
「放っておけ、今は目の前にいるあいつをどうにかした方がいいん
じゃないか？」
「それも、そうだぬ」
そして香苗、佐藤さんＶＳ憐華の闘いが始まった。
「やっとあの時の仕返しが出来ますわ！！」
憐華はハンドガンを両手に持つと二人めがけて連射した。
香苗は転がり机を盾にして凌いだ。
一方佐藤さんは動いていないのに当たらない。
「フッ、そんなでたらめな撃ち方じゃあたらないぜ？」
「なっ！？何故ですの？」
憐華はハンドガンを佐藤さんに向けようとしたその時
包丁が飛んできた。

「っ！？」
憐華は包丁をかわすと飛んできた方向を向いた。
「佐藤さんを傷付けることは許さない！！」
香苗はヤンデレモードでないと勝てないような気がしたが
頑張らなければ佐藤さんが傷付いてしまう。
「ナイスフォローだぜ嬢ちゃん。
　出来れば少し時間を稼いでくれないか？」
佐藤さんはオーラを溜めている。
「分かった。頑張ってみる」
香苗は佐藤さんを背に向けて守れるようにした。
「させませんわ！！」
憐華は移動して佐藤さんに向けて発砲した。
「駄目だよ！！」
銃弾を包丁で弾き、そのまま包丁を投げ、
ハンドガンを吹き飛ばした。
「…どうしてこの同好会の人達は人間離れしてますの？…」
憐華は銃の扱いが巧い。しかしそれだけだ。
不死身でもないし、怪力でもない、
次元を切り裂くことも出来なければ、錬金術を使うことも出来ない。
最強の武術や時間を止めるをことなど以ての外だ。
自分の力が強ければ反抗する者など居ないのに、
あのお方に喜んで貰えるのに、
せめて目の前に居る敵を倒したい。
そう考えながら憐華と香苗は睨み合っていた。
そんな光景が３０秒程続いていた。

その時、佐藤さんからすさまじいオーラが放たれていた。
「嬢ちゃんありがとな。さてあとは当てるだけだが……」

その時、本の山から波田子が飛び出てきて

憐華を羽交い絞めにした。
「油断したな……」
波田子は息を切らしながら呟いた。
「たまには役に立つじゃねぇか。
　いくぜぇぇぇぇぇぇ！！」
佐藤さんは憐華の目の前に現れると
腹に掌底を喰らわせた。
「なっ！！？」「ぐはっ！！」
そしてけりを喰らわして
波田子ごと宙に浮かせると
怒涛の連打を打ち込んだ。
「これがダンディズムってやつさ！！！！」
どうやって短い手足で攻撃しているのか不明だが
多分溢れ出るダンディズムで攻撃しているのだろう。
憐華と波田子に３０９発のパンチを喰らわすと
最後の一撃を叩き込んだ。
「どうだ？ダンディな拳はよ」

そして二人は重力に引っ張られ床に叩きつけられる。
しかし憐華は立ち上がろうとする。
「ま、まだ終わりませんわよ」
その時、扉が開かれる。
「憐華がやり過ぎないように、って
　言われてたんだけどやられ過ぎて可哀想だから
　迎えに来た」
「真央様、こいつらを懲らしめてやって下さいませ……」
真央が力を出せば多分、倒せるだろう。
「それは無理、こっちにだって事情があるから」
「何故ですの！？」
「つべこべ言わずに戻れ」

「分かりましたわ……」
そして憐華は真央に引きずられて部屋を出て行った。
遠くで「今度こそ負けませんわよー」という声が聞こえた。
香苗は力が抜けてしまった。
「あの人はなにものだぬ？」
「分からねぇ、だがただもんじゃないことは確かだな」
さすがの佐藤さんも動けずにいた。
そして暫らくの沈黙が続いた。

「やられキャラがまた一人増えたから
　アタシがやられる場面が減らないかな」
波田子は誰に言うでもなく呟いていた。

そしてその後、昇天中の雪音を連れて椿が手料理を持ってきたのは
言うまでも無い。

この物語は明確な終わりはありません（後書き）

魔王さまですね
はい元ネタはありますが言えません

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9627s/

この物語は96%フィクションです

2011年10月28日13時31分発行